

Goshin Moro

Supporters Club

News Letter

04

茂呂剛伸後援会 会報

2016/09





インタビュー vol.4 人と人をつなぎ動かすライブのエネルギー

小島紳次郎さん × 茂呂剛伸

ウエス 社長

司会・撮影・構成 ウリュウ ユウキ

オリジナルしか残らない 本物だから長く続く

小島紳次郎さん 初めに太鼓を聴いたとき、自然な響きが地面から湧き出てくる、そして人とのふれあいから生まれるリズムがこれからもどんどん出てくるんだろうなと感じて、ああ、いいなど。

茂呂剛伸 大黒摩季さんのお父様が私の家業の取締役をされていて、デビューの頃に近くで彼女の後ろ姿とバックアップする小島さんのお姿を拝見して、自分もその頃からプロの太鼓の演奏家を目指していたのでいつか一緒にお仕事をしたいと、それこそ小学校の頃から憧れを抱いてきました。30年来の憧れの小島さんと対談できるのは夢のような時間です！

小島 僕はリスナーとしての思いをアーティストに託しているわけで、これからもずっとそういう役割なんだろうな。そして北海道から全国・世界をめざす人の志を高くしたい。どこの世界でも通用する音楽をと思いつけて欲しい。若い時だけでなく一生やり続けて、聴いている人たちにとってもそれが一生のものになり、そういう人々と時間を共有する仕事ができたら素敵だなあ。

茂呂 去年の年末、ドリームズ・カム・トゥルーさんのドキュメンタリーを見て、北海道きたえーの舞台裏で吉田美和さんと小島さんがハイタッチしているシーンがあって、あの時小島さんはアーティストを見る視線に何を託しているんだろうと思いました。

小島 僕はそこに介在するというよりはお客さんとミュージシャンがどういう関係でフィットしているのかな、この歌・スタイル

でこの人はまだまだやれるだろうか、お客さんが感動しパフォーマーの思いも伝わっているかな…というのを見ている。それは生の歌、演奏だからこそ。お客さんが来た時の期待感、やっている最中の反応、帰っていく時、三つのポジションで「このアーティストは長く続くのか続かないのか」「どれだけお客さんの心の中に植え付けたか」をずっと見ているし、これから音楽をやっていく人にはその音楽が完全なオリジナルで感じられているのか、時代の流れの中の音なのかを。オリジナルしか残らないんですよ。僕はオリジナルのアーティストばかり選んでいるし、お手伝いできる場所があればオンリーワンになるためのサポートをする。だから、フォークの時代もロックの時代も本物に近い人たちをより時間をかけて世の中に伝えてきた。やっぱり音楽は長くやってほしい。ユーザーもずっとと実体験しながら人生を歩む、それが音楽の力だと思う。だからオンリーワンということに気にかけている。

茂呂 縄文文化とアイヌ文化の美しさを音楽として現代に投げかける、音楽そのもので、また英語やアイヌ語でも語りかけて感動を生むというというような新たな挑戦も始めています。エンヤやビョークは風土の伝統音楽にバックボーンがあったわけで、私も北海道にもそういう文化があるんだと世界に発信したいです。

小島 どうコラボして音源に残し発信していくか。今はどこでも音を聴けるわけで、YouTubeやiTunesを使うなどチャンスはある。その状況では、常に音源を作っておくこと、少しでもいい環境で音を作ること、今後も求めないといけない。縄文の研究をやっけていながら、コラボしてどうい

場でやるのがいいのかを考え、そして招いてくれるところにはどこへでも行くという姿を作っていく。どうパフォーマンスで感動させるか、誰とコラボすればそれに一番近くなるのかをライブで表現できるところまで磨き尽くさないと世界には通用しない。だから例えば声がかかってワールドミュージックのフェスがあるから来ないかという時に誰にもどこにも負けない確固たるオリジナルを作ることに時間を割くしかないと思う。今茂呂君の周りには縄文太鼓のコミュニティができたわけだし、みんなでやる喜びってすごいものがあると思う。だから見る人にとっても感動があるわけだし、それを磨き尽くしていかないと。僕らもオリジナルソングのない時代にシンガー・ソングライターやグループサウンズの"布教活動"をした。自分の音楽を布教していく土台は出来上がっているから、外に出ていく場面でどう音源を育みコラボしていくか。それが茂呂君の目指すところじゃないのかな。自分磨きと外とのコラボを増やしていった方がいい。

“ライブの時代”に 表現者がやるべきこと

茂呂 後援会総会のご祝辞で『(バーチャルアイドルである)「初音ミク」が歌いそこに何千何万人が集う時代になった』とおっしゃっていましたが、そのように今の音楽・エンタテインメント界ではただ歌い手が歌っているだけではない様々な演出が見られます。

小島 あれが曲のままだったら今世界でツアーをやっているところまではいかな

い。あの後ろに生のバンドが演奏しているから彼女が踊って「表現」している。それは彼女らのチームのオリジナル。曲として成立しているところに生の演奏があるからタッチ(触感)は出せるわけじゃないですが、客の盛り上がりとか。単に映像で出しているだけでは変化できないわけで、歌もダンスも狂わずその通り出せる中にギターやリズムという生のものが加わって客が盛り上がる。リズム隊がガッガッガッとしていけばタッチが変わっていく。それがボーカロイドというパターンの中に生きていく。"オー、イェー!ってやろうぜ!"って言った時にドカーン!って生の演奏が入って。

茂呂 それで完成するわけですね。

小島 一体感を作っちゃうわけですよ。「声小さいよー!」というまで打ち込んであって、そこに生の音が付くからベタじゃない。それで彼女の指示通りに盛り上がっていく。その一体感があるかないか。茂呂君の演奏も一緒に、お客さんと一体感がうまく行った時にはちゃんと残るのがある。それがライブの強み。

茂呂 アーティストはやはりファンにライブでいかに評価されるか、ライブの記憶をいかに音源で補完できるかと思っていますが、小島さんはどう考えておられますか?

小島 ライブって何度もできないし、一方でデバイスは何度も変化している。LP盤からカセット、CD、ウォークマン…時代の流れで便利で良い方へ移っていく。音源を残しておけばいつでも聴いてもらえる。茂呂君にとって良いのはDVDかもしれない。表現と合体したようなものを考えてもいいよね。やり続けるためにはビジネスをしなくちゃいけない。どの形態を使えば表現がしやすいか、ユーザーに届けられるか。音源、アート、パフォーマンスが一体になったものが茂呂君の作品ですよと、そしてライブがあるよということを考えておかないと。例えば一年間の基本のプランニングを決めてやっていった方がいい。茂呂君の表現には映像、ダンス…いろいろなものが入りやすいし、合体させたアートとしての表現をやっていけたらと思うよね。

茂呂 私はいろいろな感性を持ったお一人お一人に音、映像、ダンス…どの入口から感動してもらうかに幅広くお応えしていきたい。そこに自分のやりたいことを「縄文」というキーワードに込めています。私はもともと和太鼓奏者で、札幌の姉妹都市に演奏に行った時に日本の文化が迎えられのを実感する幸せな幼少期を過ごしましたが、さらにプロを目指していた時にジャンベをストリートで叩いている人に出会い、その音に惹かれてしまった感動を

自分の中に落とし込みたくて様々な舞台を回っていた時に、札幌舞踊会の千田雅子先生に「好きなように叩きなさい」と言って頂いて二千人のお客様の前でえも言われぬ感動を受け、それを恩返ししたいと思ったのです。でも舞台は毎日あるわけではないし自身で企画する力もないと思った時に"本場に行って腕を磨こう"と20歳で行ったのが西アフリカのガーナでした。そこで出会った子どもたちの演奏があまりにすごすぎた。全然違う世界観が待っていて、高くなった鼻をボキーン!と折られました。学んで、そして自分自身を発信しなきゃだめだと。一年間学んで北海道に戻った時に、この地から何をコンセプトに発信したらいいのかと思いました。まだ開拓150年、時に文化や歴史がないとまで言われることもあるこの地で。そんな時に札幌大学の原子修先生に出会い、北海道特有の「縄文時代」があり、その時代の人々はアイヌの先祖でもあるということを知って「茂呂君は縄文太鼓を叩き、歴史を太鼓に替えて世界に発信すべきだ!」と言われた瞬間に探していたものに会えたのです。演奏を始めるとあちこちからチャンスを頂けるようになって、自分ができることは一生懸命に叩くことだと。そこからいろいろな出会いに恵まれていきました。現代芸術家の端聡さんには「茂呂君がやっていることは邪道じゃない、世界で誰もやっていない現代芸術なんだよ」と後押しを頂きました。今、アイヌ文化を継承している川上さやかさんや、ピアニストのhajimeさんと一緒に音楽を作って、やっと北海道から発信し世界と戦える準備ができたと思っています。自己満足だけでなく、外部評価だけでもなく、北海道の人たちから私たちの音楽だと認めてもらえることも大事だと思っています。7月にフランスに行って太鼓を叩いてくるのも小さな一歩に、向こうにもコミュニティを作りながら評価が返ってきて、そしてこちらでも弟子たちに恵まれて作ることを叩くことを教えて…という循環を作り、10年後に世界と戦う自分でいられるか、長くこの地で続けるために何を選択し誰と会いどこに向かって階段を上っていくか、小島さんにもご指導頂きながら進んでいきたいと思えます。

小島 やっと揃った素材を磨く作業、自分のオリジナルを作る途中なのだから、あえて北海道と言わなくてもいいんじゃないかなという気がする。北海道も茂呂君も発展途上。茂呂君が思うコラボを磨いていった方が本当のオリジナル、オンリーワンになる。やり続けるしかないよね。その先に世界に出せる音源、映像がある。「これ見てください!」とプロモーションすることが絶

対に必要なけど、そこまでやっている人は本当に少ない。でもそれはアーティストとしての努力だし、映像を作ったり翻訳をしてくれたりという仲間を増やしていくことをどこの国のミュージシャンも今やっている。

・・・音楽が動画によって世界に拡散した例に日本だとPerfumeやBABYMETALがいるように、気になるもの、好きなものをもっと知りたいと世界の人は思うわけですよ。

小島 そこにニュースを出し、常に発信していく。茂呂君のホームページにも昨日のステージの映像があったりして、来てくださいねと他の言葉に訳せる仲間がいて…そういうのをやるのがプロモーション。どこにチャンスがあるかわからないし、その時に対処できる仲間がいればできる。アルバムを作ったりツアーをしたりするのもクラウドファンディングで資金を集め、その額に応じた特典があったり。ただ作るのではなく続けていくために、ファンを増やすだけではなく同じように表現してくれる仲間を増やさなきゃならない。

茂呂 先日でも会合で「北海道らしい音を」と招かれて800人の初めてのお客様の前で仲間で演奏した時に「ブラボー!」と評価を頂けて自分たちのやっていることを再認識しましたが、それをエネルギーにしてまたステージに立ちたいという向上心につながるんですね。一つ一つのステージに次を見据えながら演奏する、だから私は札幌で育てて発信して…とやはり思うのですが、でも呼ばれたところにはどこへでも!という気持ちです。



『RSR』がつくる 2/365の物語

茂呂 今年で18回目となる「ライジングサン・ロックフェスティバル(RSR)」はどういう思いで始め続けて来られたのですか?

小島 40年くらいずっと野外のライブを作ってきた。それを2日間泊まり込みで、音楽にどっぷり浸かってもらおう…ということをやりはじめたらそれが時代に合った。スタートした時は20代だった人たちがもう

30代後半になる。お客さんの変化に合わせてながら若い人からキャリアの長い人まで出演者を選ぶ。今年はジャズに挑戦している八代亜紀も出るけど、それは音楽にはいろんなジャンルがあるということ表現したいから。自分・家族・友達との大切な時間の中に音楽があって、真剣に汗かきながら盛り上がる時もあれば、ご飯を作ってワイワイやっている時もある…48時間自由にやってよ、という思いがあるから続けられた。

初っ端はTシャツ、タンクトップにヒール履いて来る子たちがいたけど、夜通しやる経験がなかったから夜になったら震えまくってる。それから知恵を使い始めたら楽しくなるわけ。誰が出てくるから行こう…というのから、今は何着て行こうか、誰と行こうか…と変化している。今やお客さんの6割は女性。キャンプに行ったことがない人が隣の人にテントの立て方を教わり、ご飯一緒にどうですか?というつながりができるし、ライブも見ずにテントで盛り上がっている人に聞いたら「音楽が聞こえてきて久々にここで会って、そしてまた来年会おうと別れる…こうしている48時間がいいんだ!」って言う。そういうコミュニティができています。そうして2世代、3世代の人がやってくるようになり…という物語をユーザーにガンガン作らせていく。リピーターは半分以上だし、アーティストの名前を出す前にチケットも半分売れる。そして僕たちは毎年アンケートを取りながら少しずつ予想を裏切って作っている。それが続く秘訣かなあ。

レストランにもメニューはオリジナルをお願いしているし、そうするとお店の人たちも楽しくなる。そこから「いちごけずり」が生まれて本州のフェスや北海道フェアでもすごい行列ができるようになった。オリジナルを作ればどこに行っても一番だからね。

茂呂 こうして48時間を楽しみに来るんですね。

小島 夜中にセッションやったりね。

・・・私も昨年の「フライデーナイトセッション」を見ましたが、豪華な競演に、このために一年生きてきた!という思いに本気でなりました。

小島 その領域を越えられるものに茂呂君がなってくれたら、どんどん行けると思う。僕も声をかけるしね。例えばアフリカに「ドラムトラック」という演者と千人のお客さんが共に太鼓を叩く舞台があるけど、一人の表現者に千人がというより、千人の奏者がやっている…というのが面白いよね。そういう新しい時代のエッセンスを自分の中で消化した方がもっと質の高い、他

を寄せ付けられないものになる。コーラスやゴスペルをやるとやめられないというのは全員が歌うから。全員で一つのものに向かう、その中にいるとよりバイブスを感じるんだよね。

茂呂 その小さな実践として50人での太鼓の演奏を考えていますが、その積み重ねですよね。

小島 めぐり会いと積み重ねが大きな輪を作る。やっとな材料は揃い、ファン、お弟子さん、一緒にやってくれる人たちが揃っているわけだから、そこには真ん中が必要。ゴスペルは歌っている人が一番震えているからね。

茂呂 それがお客さんに一番伝わりますからね。私たち北海道の表現者にとってはやはりRSRで最大の「サンステージ」で演奏するのが夢です。もっと大きなステージに数年の内に立てるように頑張ります!



次の世代こそ「出るアクション」で「もっとやれ」!

茂呂 次の世代の表現者に期待することは何でしょうか?

小島 若い人たちは体験が少なすぎる。道外、海外に見に行く、触れることはとても大事。茂呂君もアクションがあったからこそ一生やろうと思ったわけで、「出るアクション」が必要だと思う。例えば若い人が海外に出ることを応援するファンドを作ることでも必要だろう。「芸森スタジオ」を作ったのも、いいものを体験することによる変化はすごく大きいから。

僕は海外に新しいチャンスを見つけないに行っている。「さっぽろオータムフェスト」も、ミュンヘンで見たものをこれはいいなと思って札幌市にかけ合ったし、RSRも30年前にイギリスの「グラストンベリー・フェスティバル」を見てこれを日本でやりたいと思ったのがきっかけだった。刺激を自分の中で変化させないと残っていかないので、自分の目で見に行くという癖がついている。

アメリカの「サウス・バイ・サウスウェスト(SXSW)」も30年続いていて、ミュージシャ

ンも役者も映画監督もITの人も集まってくる。2007年にそこでTwitterが発表されたように、「こんな表現を考えている」人がチャンスと出会いを待っている。9万人が決して安くない参加費を払って来る。札幌もそういうことができるとして、今年「NoMaps(ノーマップス)」というのを立ち上げる。札幌にはすでに短編映画祭があるし、初音ミクもある、音楽のインフラもある。やっとな僕らの世代が動けるようになったから、一緒にやろうと声をかけた。それは全て次の世代のため。札幌の多文化と150年の歴史、これは強みだと思う。

茂呂 一歩進んだ者勝ちです。一歩を踏み出せばその道の半分は進んだようなものですし、それはチャレンジできる環境を作ってくれた先輩たちのおかげです。その土壌に上書きできる環境がやっとな北海道にもできたと思います。あと2年で40歳になりますが、先輩たちが進んでいらない以上年齢は理由にならないので、私も前へ前へと進む勇気をもらっています。

小島 北海道は自然と四季があるからこそたくさんのアーティストが出てくるし、最高の環境だと思う。例えば春を待つ気持ち、「雪の中で彼女を待っている」というようなフレーズから歌ができる。その感覚で太鼓を表現するのはアフリカではできないと思うし、そこに技術が生まれ表現が変わってくる。そういうインフラに恵まれた北海道で茂呂君のオリジナルができればと思う。

茂呂 アフリカに行った時に技術では勝てないと、では何で勝てるんだろう…と思った時に北海道の四季が育んだ感受性を太鼓に込めれば、勝ち負けでなく評価してくれると思ったのです。「自分でやれ!」とかつて小島さんに頂いた言葉を自分でも「やってやるぞ!」と現実に変えようと動き始める、それが自分の音になっていくと思っています。

小島 「やろう!」と思う人を、僕はバックヤードで支えているだけだから。

茂呂 バックヤードで「もっとやれ!」と言って頂けるような表現者になりたいと、本気で思います。必ずやります!

小島 「やれる!」って思わなきゃ!



(2016/6/2 ウェス本社(札幌・西区)にて)



BON!ダンス & ジャンベワークショップ

茂呂剛伸
in
札幌芸術の森

祝! 札幌芸術の森30周年

今年、『札幌芸術の森』が開園して30周年。この節目をお祝いで多彩な催しが行われています。茂呂剛伸もこの夏、二つのイベントをここで開催しました。7月23日(土)は野外ステージでたくさんの人と一緒に思いっきりジャンベを鳴らし楽しむワークショップ。8月5日(金)・6日(土)には「芸森夏まつり」に合わせて、縄文太鼓のリズムとともに大人も子どもも輪になって、動物たちの仮装をしてお盆踊り「BON!ダンス」。どちらも自然の中で音で遊ぶ楽しさを皆さんとともに満喫しました。





Goshin MORO in FRANCE

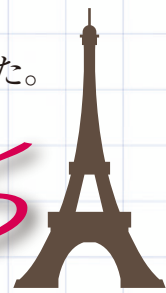
2016年・夏。茂呂剛伸、念願の海外演奏へ！

新たにご縁をいただいて、縄文太鼓とともに海を越え、フランスに行っていました。

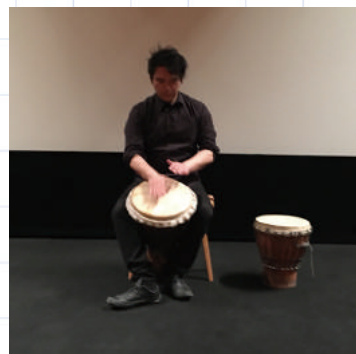


▲7月14日は日本でも「パリ祭」と親しまれている革命記念日。
エッフェル塔から花火が打ち上げられました！

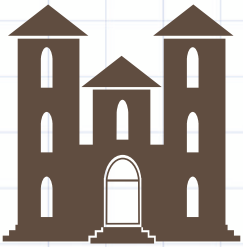
PARIS



▲コンテンポラリーダンサーで友人のオリバー・バルザリーニさんと。
フランスでまた新たなコラボレーションが生まれるかもしれません。



日本文化会館にて、来年開催予定の演奏会のリハーサル。▶
フランス、ヨーロッパの皆さまにも縄文の響きをお届けします。
ぜひお知り合いにも茂呂と縄文太鼓のこと、ご紹介ください！



Avignon

アヴィニョンはフランス南東の街。
毎年夏に行われる演劇祭には、ヨーロッパ各地から9万人の演者と観客がやってきます。
メイン会場は教皇庁の前庭での野外演劇。
大小100を超える会場でパフォーマンスが繰り広げられます。



教皇庁の前庭で即興のパフォーマンス。
ダンスはフランス在住のコンテンポラリーダンサー、菊澤好紀さんです。



首都にして芸術の都・パリと、陽光溢れる南仏・アヴィニョン。二つの街に流れる縄文の響き。
時代を超え、そして距離をも越えて、これからも挑戦を続けます。

11月開催 2つの演奏・展示のご案内

北海道立近代美術館 近美コレクション『北海道美術紀行』

芸術週間・djemp公開制作演奏

—11/1(火)～5(土) 毎日演奏—

7月から開催中の『北海道美術紀行』は、私たちが共通して思い浮かべる現代の北海道のイメージに、江戸・明治期からこれまでに画家たちが捉え、繰り返し描かれ、そして定着してきた北海道のイメージを重ねながら、旅をするようにそのイメージをたどることをテーマとしています。また、映画や小説、産業景観を通じて新しく発見され、近年国際的にも知られるようになった北海道の姿にも注目していきます。

11月の「芸術週間」に、本展にも出品されている同館所蔵の北海道の四季を描いた日本画の名画「道産子追憶の巻」(作・岩橋英遠)へオマージュを捧げた楽曲を茂呂とピアニストのhajimeさんによるユニット「djemp」(ジャンピ)で公開制作し、演奏を行います。

●11月1日(火)～5日(土) 毎日15:00～16:00

●会場…北海道立近代美術館(札幌市中央区北1条西17丁目)

●出演…djemp(ジャンピ)(茂呂剛伸・hajime) ●演奏は入場無料です(*展示室観覧は観覧料が必要です)

CAI02 露口啓二・茂呂剛伸 二人展

—11/16(水)～26(土)開催—

写真家として北海道の風景と歴史を捉え続けている露口啓二さんとの二人展を札幌で開催いたします。

会期中は毎日演奏会を予定しております。詳細は後日お知らせいたします。

●11月16日(水)～26日(土)

●会場…CAI02(シーエーアイ ゼロツー/札幌市中央区大通西5丁目 昭和ビルB1F)

いずれも詳細はこちらで随時お知らせいたします。

■Webサイト…<http://www.goshinmoro.com/>

■Facebook…<https://www.facebook.com/goshin.moro> ([茂呂 剛伸]で検索)

これからの会報発行予定

いつもご愛読下さいまして、ありがとうございます。ちょうど1年前に創刊した本誌は、皆さまのおかげをもちまして2年目に入りました。引き続き年3回の発行を予定しております。今後も茂呂剛伸の活動、親交のある方々との対談などを通じてより充実した内容を目指してまいりますので、よろしくご愛読のほどお願いいたします。

■vol.05…2017年1月下旬発行予定 ●特集…2016年秋の活動レポート ●インタビュー…本田優子さん(札幌大学副学長 地域共創学群教授)

■vol.06…2017年5月下旬発行予定 *内容・発行日は変更となる場合がございます

*バックナンバー(vol.01～03)ならびにフランス語版をご希望の方は、事務局までお問い合わせください

*ただいまvol.01～03までの内容を抜粋した英語版を制作中です(10月完成予定)

茂呂剛伸後援会 ご入会のお誘い

縄文の響きを未来へ…そんな思いをより多くの人々に伝えていく茂呂剛伸の活動をより近くで支えていただけるよう2015年4月に発足したのが「茂呂剛伸後援会」です。

本会報のお届けやイベントへのご案内、チケットの優先販売等の会員特典がございますので、是非ご入会いただきますようお願い申し上げます。

【入会のお問い合わせ】FAX 011-200-2113・メール moro-t@mirai-t.com *茂呂剛伸後援会ご入会の旨、タイトルにお書き添えください